

Eureka X

六年制通信 No.9 令和4年6月3日(金)号

何をどのくらい読むか

この質問、もうどれくらい受けてきたことでしょうか。そして私もその答えを誰か教えてくれないかと、何度も思ってきました。世の中には本が溢れています。こんなことを書いている間にも本は増え続けています。一生のうちにその全てを読むことはできません。無人島に一冊だけ持っていけるとしたら何にするかという問いが一時流行りました。確か第一位は『聖書』だったと記憶しています。『広辞苑』という意見もありました。面白かったのは「無人島でしょ、そんなのサバイバルの本に決まってるやんか」でしたかね。そんなことを聞いているのではないわけですが…。

古今東西、読書について書かれた本は無数にあるでしょう。私たちも小林秀雄やら三木清やら、評論家や哲学者たちが読書について多くを語っているのを知っていますし、読んでもきました。中でも小泉信三の『読書論』が最も定評があるのではないのでしょうか。私も若いころに読んで感銘を受けました。この人は慶應義塾の塾長を勤められた偉い学者です。『平生の心がけ』（講談社学術文庫）一冊だけでも読めばその教養の高さがよくわかりますし、若き日の平成の陛下（今の上皇様）の教育係に任命されていますから、その優れた教育観もよく知られていたのですね。小さい頃は福澤諭吉の家に住んだ経験もあって、諭吉に可愛がられたそうです。ちなみに、この小泉さんが敬愛してやまなかった軍人が米内光政という提督です。盛岡にある米内さんの銅像にはめ込まれた銅板に書かれた経歴は小泉さんの撰文（せんぶん）によるものです。

さて、小泉さんの『読書論』から私は二つの強い刺激を受けました。一つは、良書は再読三読せよということです。これは、実は米内さんも同じことを言っています。阿川弘之の『米内光政』によると、小泉信三から私家版の「海軍主計大尉小泉信吉」を贈られた米内さんが礼状を出しているのですが、そこに「…第一読は恰かも飢えたたるものの食を食するような早さで、第二読は相当咀嚼しつゝ漫々的に読了致し申候第三読ではじめてホントウの人間味を味ひ得る様な気がいたし申候」（新潮文庫 p.371 ルビはわざと振りませんでした。頑張って読んでごらん）とあります。三回続けて読んでいるわけですね。もう一つ強く印象に残っているのは、外国語で読めるようになりなさいということ。一つでいいから、読書ができるくらい外国語を習得しなさいということが印象に残っています。私は学生の頃、先生方から同じことを何度も言われました。君たちも辞書を引き引きでいいので洋書を読めるようになってくださいね。

さて、『読書論』にはドイツの哲学者ショウペンハウエルの『読書について』からの引用も多かったと記憶しているので、先日『読書について』を再読しました。

まず、本を読むことと自分で考えることは違う、従って「読書は思索の代用品にすぎない」と言っています。読書、特に多読を否定するような文言が満載です。いくつか挙げましょう。「書物から読み取った他人の思想は、他人が食べ残し、他人が脱ぎ捨てた古着にすぎない」、「読書は言ってみれば自分の頭ではなく、他人の頭で考えることである」、「読書で生涯をすごし、さまざまな本から知恵をくみとった人は、旅行案内書をいく冊も読んで、ある土地に精通した人のようなものである」、「読書にいそむかぎり、実は我々の頭は他人の思想の運動場に過ぎない」などなど。これ、もう悪口ですよ。本を読むな、たくさん読むな、そう書いてあるとしか思えません。しかし、これは「読むべきではない本」という基準がショウペンハウエルにはあるのです。それらの本を指して言っているのです。出版されたばかりの本とか今で言うベストセラーとか、そういうのは読むなどはっきり言っています。ではどんな本を読めばいいのか、これについてもちゃんと書いてあります。天才の書いた本を読みなさいと。「つねに読書のために一定の短い時間をとって、その間は比類なく卓越した精神の持ち主、すなわちあらゆる時代、あらゆる民族の生んだ天才の作品だけを熟読すべきである」、さらに「悪書を読まなすぎるということもなく、良書を読みすぎるということもない」ということです。多読を否定しているわけではないのです。また、「反復は研究の母なり、重要な書物はいかなるものでも、続けて二回読むべきである」と言っています。精神の清涼剤としてはギリシア・ローマの古典に勝るものはないそうですよ。試してみてください。精神が爽やかにになりますよ、きっと。

今週のおすすめ

・小森陽一 『オズの世界』 (集英社文庫)

私は映画を先に観ました。タイトルは「オズランド」、ヒロインは波留さん。上司の小塚役には西島秀俊さん。なかなか面白かったので原作を読みましたのですが、こっちの方が面白かったですね。映画は原作にかなり手を入れていました。

東京の企業に就職したヒロイン。配属先がまさかの遊園地。しかも地方の。実際のロケ地は熊本らしい。本でも熊本になっています。そこで有能だが身勝手な上司の小塚に出会って、反発しながら自分でも気づかないうちに、嫌っていたはずの仕事と小塚本人にも惹かれていく…。本では「こづか」、映画ではタイトルを意識してか同じ字で「おづか」となっています。まあ、細かいですけど。

この映画も本も働くとはどういうことか、仕事をする人の魅力とはどんなものか、そういうことを考えさせられます。配属された瞬間から東京へ帰りたくて仕方なかったヒロインが、どうして田舎の遊園地に残りたいと思うようになったのか、彼女の気持ちの変化が私にはわかるような気がします。私たちは「楽しい仕事」を求めがちですが、つまりそれはどこかにそんな仕事があると信じているわけですが、大切なのは「楽しく仕事をする」ことだと教えられているように思いました。私は映画から入りましたが、本から入ってもいいと思います。きっと映画も観たくなるでしょうから。

BGMは Aerosmith の *Don't Want to Miss a Thing* でした…。